

二国間交流事業 共同研究報告書

令和5年4月30日

独立行政法人日本学術振興会理事長 殿

[日本側代表者所属機関・部局]
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所
[職・氏名]
准教授・品川大輔
[課題番号]
JPJSBP 120212302

1. 事業名 相手国: ベルギー (振興会対応機関: FWO) との共同研究

2. 研究課題名

(和文) バントゥ諸語の過去と現在: ミクロ類型論, 歴史比較言語学, 辞書学の統合による新展開

(英文) The Past and Present of Bantu Languages: Integrating Micro-Typology, Historical-Comparative Linguistics and Lexicography

3. 共同研究実施期間 2021年4月1日 ~ 2023年3月31日 (2年)【延長前】 2021年4月1日 ~ 2023年3月31日 (2年)

4. 相手国側代表者 (所属機関名・職名・氏名【全て英文】)

Ghent University・Professor・Koen Bostoen

5. 委託費総額 (返還額を除く)

本事業により執行した委託費総額		4,750,000 円
内訳	1年度目執行経費	2,375,000 円
	2年度目執行経費	2,375,000 円
	3年度目執行経費	- 円

6. 共同研究実施期間を通じた参加者数 (代表者を含む)

日本側参加者等	6名
相手国側参加者等	6名

* 参加者リスト (様式 B1(1)) に表示される合計数を転記してください (途中で不参加となった方も含め、全ての期間で参加した通算の参加者数となります)。

7. 派遣・受入実績

	派遣		受入
	相手国	第三国	
1年度目			()
2年度目	4	1	5(0)
3年度目			()

* 派遣・受入実績(様式 B1(3))に表示される合計数を転記してください。

派遣:委託費を使用した日本側参加者等の相手国及び相手国以外への渡航実績(延べ人数)。

受入:相手国側参加者等の来日実績(延べ人数)。カッコ内は委託費で滞在費等を負担した内数。

8. 研究交流の概要・成果等

(1)研究交流概要(全期間を通じた研究交流の目的・実施状況)

本研究交流の目的は、バントゥ諸語のミクロな類型的バリエーションに関する成果の蓄積をもとに、それを生み出してきた歴史的変容過程に関する最新の研究成果と比較語彙データとを有機的に統合することで、サハラ以南アフリカの広大な地理的範囲に拡張したバントゥ系集団の局所的な移動や、それに伴う言語分岐と混交のプロセスに新知見を提供することであった。とりわけ実施初年度においては、**covid-19** のパンデミックによる渡航制限の影響を受け、実質的な活動としてはオンラインでのキックオフ・ミーティングを開催するのみであったが、2年目の2022年度には多様な交流活動を展開し、さまざまな学術的成果を生み出した。

(2)学術的価値(本研究交流により得られた新たな知見や概念の展開等、学術的成果)

本交流が目的とする局所的な言語分岐の過程や地域的なバリエーションに関する新たな研究としては、キリマンジャロ・バントゥ諸語の系統的分岐に関する形態統語論的なデータからの検証(品川)や、スワヒリ語ザンジバル諸方言とコモロ諸語との歴史的関係の再検討(古本)、また西部沿岸語群(**West Coastal Bantu languages**)の代名詞形の再建(**Pachiarotti**)などに関する研究が展開され、それらの成果は2022年9月にゲントで行われたワークショップ、また2023年3月に東京で行われた最終ワークショップなどで議論された。

また最終ワークショップにおいては、動詞の自他交替および主語のプロパティに関して、それぞれ **Bostoen** と米田が類型論的なクエスチョネアを設計し、それらに対する参加研究者からのデータを突き合わせる形で議論がなされ、通バントゥ諸語レベルのバリエーション研究やその歴史言語学的研究への示唆に関する新たな視点を得た。

この交流をきっかけとするユニークな成果としては、品川と相手国側若手研究者の **Lorenzo Maselli** による鼻音後位置における閉鎖音の顫動音化現象(**Post-nasal trilling, PNT**)に関する知見があげられる。**PNT** は、その現象自体がこれまでバントゥ語学においてほとんど知られてこなかったが、2021年5月のキックオフ・ミーティングにおける品川の発表によって、この現象がいくつかの地理的に離れた言語で確認されることが明らかになり、その知見をまとめる形で、この現象のバントゥ諸語における類型的概観に関する(おそらく世界的にも最初の)報告を国際バントゥ諸語学会(**9th International conference on Bantu languages**; 2022年6月マラウィ・ブランティアにて開催)にて、国際共同発表の形で行った。

(3)相手国との交流(両国の研究者が協力して学術交流することによって得られた成果)

双方の研究者が協力して学術交流することで得られた成果としては、以下の2点が代表的なものとしてあげられる。ひとつは、バントゥ諸語歴史言語学の最新の知見の一般社会への還元である。この研究課題の前提となる学術的背景は、相手国研究機関のゲント大学がバントゥ諸語歴史言語学における世界的研究拠点であり、相手国側代表者の **Koen Bostoen** 教授はバントゥ系民族の歴史的移動(いわゆる **Bantu expansion**)に関する歴史言語学的研究で世界をリードする研究者であるという点である。一方日本側参加者の米田は、**Bostoen** 教授の全面的な協力を得て、その最新の知見を反映する形で、『岩波講座 世界歴史 第18巻 アフリカ諸地域 ～20世紀』に「歴史言語学からみるバントゥ系民族の移動」と題する論考を寄稿した。これは、これまで伝統的に理解されてきた‘**early split**’(まず東西分岐が先に生じて、その後南に移動していったとする説)を覆し、‘**late split**’を含む最新の分岐に関する仮説と議論を紹介した本邦初の著作である。

もう一点は、相手国参加者 Gilles-Maurice de Schryver 教授の監修による ILCAA Bantu digital lexical database の構築である。これは、日本側機関であるアジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) から「アジア・アフリカ基礎語彙集」シリーズとして出版されてきたバントゥ系言語の語彙集を、日本側研究者が電子テキスト化し、それを資源として de Schryver 教授が言語間比較検索を可能とする語彙データベースを構築するという一連の共同研究による成果であり、2023 年度内に AA 研情報資源利用研究センター (IRC) のオンライン研究資源として公開の予定である。

(4)社会的貢献(社会の基盤となる文化の継承と発展、社会生活の質の改善、現代的諸問題の克服と解決に資する等の社会的貢献はどのようにあったか)

上記 ILCAA Bantu digital lexical database の構築作業のために二週間にわたって AA 研に研究滞在された de Schryver 教授は、その期間内に計 5 回もの研究発表および講演を精力的にこなされた。それらのうちで特筆されるのは、2 月 28 日に国立情報学研究所の情報システム研究機構・データサイエンス共同利用基盤施設 (ROIS-DS) の研究セミナーでの講演「The end of lexicography, welcome to the machine: On how ChatGPT can already take over all of the dictionary maker's tasks」である。この段階でプロトタイプのパブリックから 3 ヶ月足らずであったこの最新の技術的イノベーションが、現在の、そして未来の辞書学に与えるインパクトを、デモンストレーションを交えて発信したこの講演は、世界中から 200 名以上の参加登録者を集めるなど大きな関心を生んだ。講演の内容は本交流事業のテーマを直接反映するものではないが、本研究課題を支える 3 つの方法論のひとつである辞書学と AI がどのように共存しうるのかという極めて現代的な議論に一石を投じる貢献をなした。

(5)若手研究者養成への貢献(若手研究者養成への取組、成果)

2022 年度に双方 1 名ずつの若手研究者の交換滞在を行った。日本側からは、参加研究者の古本を相手国機関のアントワープ大学に派遣した。滞在中は、参加メンバーによって構成される BantUAnt Project の研究室へのアクセスが認められ、プロジェクトメンバーとの研究交流を図るのみならず、プロジェクト研究会における発表の機会が与えられた。さらには Bostoen 教授から直接研究上の助言を得るなど充実した研究滞在となった。

一方、相手国側からはアントワープ大学 BantUAnt Project に属する PhD 研究者の Lorenzo Maselli 氏を招聘した。同氏は上述のとおり品川と国際共同発表を行った関係にあり、滞在中には同氏が現地調査によって収集した Sakata 語群 (Forest Bantu と呼ばれるコンゴ盆地帯で話されるバントゥ系言語) における rhotic sounds のバリエーションに関する研究討議を行った。また品川が運営に携わる東京アフリカ言語学研究会において、「Phonetic and phonological reconnaissance of the Mai-Ndombe (DRC): case studies into close-quarter sound variation」と題した研究発表を行い、最新の研究成果を国内のアフリカ言語学研究者に提供し、さらには研究上のフィードバックを得た。これらの経験を踏まえ、Maselli 氏は博士学位取得に向けたキャリアパスを順調に進んでいる。

(6)将来発展可能性(本事業を実施したことにより、今後どのような発展の可能性が認められるか)

本事業の実施によって、それまではベルギー側の Bostoen 教授と日本側の米田および品川との間の個別関係にとどまっていたものが、機関レベルの、あるいは両国のバントゥ諸語コミュニティ間の共同研究ネットワークに拡張した。このことによる今後の研究発展への可能性は少なからぬものがある。まず、本事業を契機とした人的交流を今後も続けることで、上述のような形でさまざまにその萌芽が得られた共同研究が、より実質的な形で発展することが期待される。また、上述の ILCAA Bantu digital lexicon は、今後もデータ拡張作業を続ける予定であり、AA 研が提供するオンライン研究資源としてより広い研究文脈での利活用が期待される。

(7)その他(上記(2)～(6)以外に得られた成果があれば記載してください)

例:大学間協定の締結、他事業への展開、受賞など